

「フヘー、定、つんぽならつんぽで宜い、それにどつんぽとは酷い」

「エ、聞こへるのんかいな、そんな事を言えへん」

「他の事は解らんが、フヘーつんぽは口の動き様で解る」

「難儀やな、叔父さん、此處へ書きませせ、きよは、ひよりがよいので、さくらのみやへ、はなみにいくのんや」

「フヘーなんや書いてるが、フヘー私は無筆で讀めぬ、兎に角、宅へおいで」

無理に定はんを引つ張つて歸りました。其様な事は知りまへん、寅はんと喜いさんは土手下で一服して居ります、松さんは櫻の宮へ行きましたが、時刻が早いのでぶら／＼と遣つて來ました。

「オイ喜いやん、チョツと見てみ、松さんが來た、身體が大きいので宜う似合ふな」

「そうや、第一目玉が大きい、盗人眼や」

「そんな事言ひな、松さん聞いたら怒るで、オイ松さん」

「どうや」

「今言ふてるね、宜う似合ふと」

「定はんは、如何したんや」

「サア、モウ來るやろうと思ふて居るね、然し松さん貴郎は櫻の宮やで」

「然うや、今櫻の宮へ行つたのやが、早いので仕方がないので此處へ來たのんや」

「定はんが來たら、すぐに行くモウ一遍櫻の宮をウロツいて來て」

「ほんなら定はんが來たら、すぐ來てや」

「宜しや、じきに行く」

松さんは櫻の宮へ行きました。寅はんと、喜いさんと兩人が、尻から煙の出る程、蓆を喫んで居る處へ、お越になりましたのが、西國邊の御武家様、頭は大髻、物に例へば百貫目の陀羅尼助ニツ折か、雪隠の屋根に琴箱を乗せた様な恰好、細元服と言ふて指が二本這入り兼る、身には黒羽二重の五ツ紋附對の羽織に、段小倉の袴紺足袋に雪駄履き、長い刀を流儀に差し、

「時に中村氏、何と好い景色では御座らぬか」

「如何様、左様ぢや、平野氏」

「是れが、豊太閤が築かれし、南面山不落城、此の流れが音に名高き淀川ぢや」

「成程、國元に斯様な處が有れば、我々が如何斗り愉快でかな御座ろう」

「當所櫻の宮は現在が満開と承る、國への土産に見物致さうでは御座らぬか」

「如何にも左様ぢや」

「併し、時刻も早いで茶店等も出て居らぬで暫時此處にて休らひ行かう、幸ひ彼方に順禮が居る、蓆